

僕たちが忘れかけていたのは 円運動の割り切れなさ?

軽いめまいを覚える……

DynaBookシリーズのタッチパッドは、右端と下端のわずかなエリアにそれぞれ上下方向と左右方向のスクロール機能を付加している。指先で右端をツツツとなぞると、その動きに合わせて画面が上下にスクロールする。ソフトウェアで実現している機能なのでユーザーが任意に再設定できるのは当然として、操作をいったん会得してしまうとこれが手放せなくなるから不思議だ。他のノートPCのタッチパッドで同じジェスチャーを無意識にやってしまい、画面がスクロールしないことに驚いたりする。愚かな行いではあるが、それを特別な愚かさとは思わない。東芝の目論見がいかに優れているのかということを図らずも証明しているだけだ。

良くできたユーザーインターフェイスは意識の深層に入り込んで原体験化する。会得時間が短いほどに深層化は高まるようで、身体に強く刻まれた利便性は、同じような形態に巡り会うとムクムクと頭をもたげ、有りもしない機能を指先で呼び出そうと虚しい拳動を繰り返す。東芝は、そんな拳動を促す私のトリガーボタンをポンと小気味よく押したようだ。

“良くできたユーザーインターフェイス”と簡単に書いたが、モノの歴史はまさにこの一点をめぐる死屍累々の変遷と言っても過言ではない。発達が未成熟なデジタル機器においては、この瞬間にも屍が刻一刻と増えつつあるわけで、さてその屍の起源はというと、時は1968年12月9日にさかのぼる。

それは、かのダグラス・エンゲルバートがサンフランシスコのJoint Computer Conferenceで、NLS(on Line System)なるモノの体系を発表した日として刻まれなけれ

ばいけない。この会合で、彼は今や死語と化したビットマップディスプレイやマルチウインドウ、スクリーンエディターなどとともに、マウスの原型をお披露目している。バッチ処理主体の計算機が主流だった時代に彼が投げた小石が、現代にどれほどの大波となって私たちを波間に漂う小舟化したのかは議論を待つまでもない。

その凄みのようなものは、言葉ではちょっと表現できない。画面をマッピングして作業領域をウインドウとして定義し、それをマウスで指し示すという行為は、まさに空間と時間の定義にほかならないわけで、そうした概念をコンピューティングに持ち込んだ功績は、それがとてつもなく即物的だったという一点において絶句を誘う。私などは、想像しただけで軽いめまいを覚えてしまうほどだ。

誰のためのデザイン?

ゼロックスのPARCでAltoが産声をあげ、それをパイレーツ気取りのスティープとウォズニアックの2人のジョブズがLisaに結実させていく後半の歴史は、私にとってはオマケの域を出ないのだが、それにしても数多あるユーザーインターフェイスのほとんどがこの日に集中していることを思うと、私たちはこの30数年が何だったのかと太息の一つもつきたくなる。

DynaBookに話を戻せば、タッチパッドをウインドウのスクロール座標と相対化させるのに私たちは優に5年の歳月を費やしているわけで、その前のトラックパッドはご存じのようにマウスをひっくり返したただけのだから、進歩らしき痕跡すらないのだ。

あえて極言するけれど、私たちは相対化のプロセスにおいてポインティングという行

為を超越したことがエンゲルバート以降に一度もない。それを思う時、私はまたもや軽いめまいに襲われる。

音声認識とか瞳孔追尾とか果てはサイコキネシスばりの思念表出とかさまざまな仕組みが提案されているけれど、それはパラダイムではなくてあくまでポインティングという行為の先に見えるリニアな線なのだと思う。あるオブジェクトをポインティングするという行為に演繹されるのは、選択の有無である。それは取りも直さず、選択する/しないというヒトの意思の有無である。意思を表明するということは、コンピュータから見れば己の無目的状態を指す。

今、己が何を成そうとしているのか。コンピュータがポインティングを超越する瞬間は、コンピュータ自らが己の目的を把握する時でしかない。そうしたパラダイムは、ひょっとしたらXMLの普及によって意外に早く実現するのかもしれない。(これはちょっとオーバーな表現だけれども)

イベント駆動型のノイマン・コンピューティングにそうした活路はあるのかと大上段の議論をしても仕方がないので、認知科学の第一人者であるドナルド・A・ノーマンにならって、私は登場するモノのユーザーインターフェイスを吟味し続けるよりほかはない。その問いは『誰のためのデザイン?』という至極単純でいて答えの出ない禅問答に似ている。

そういうって、どういう?

過日、IIJ元会長の深瀬弘恭氏と一献傾けていると、意図するでもなく談義はクルマの事になった。

「知ってる? BMWの今度の7シリーズって、OSにウインドウズ CEを積んでるんだよ」



この一言に私はお猪口の越乃寒梅だったか雨後の月だったかを吹きこぼしそうになったのだが、もっと驚いたのはその先だった。「シフトレバーもなくなっちゃってさ、ダイヤルが1個あるだけなんだ」

ハンドル部にシフトメカニズムを追いやったおかげで、シフトレバーがあるべきフロアの箇所にはiDriveと命名されたエレクトロニクスの制御コントローラーが鎮座しているというのである。氏は12気筒の750も所有していた官能のBMW大好き人間なのだが、今の8気筒の740を当分乗られると私は推察した。

「そんなことして大丈夫かなあ」

と訳もなく怖がるのはこの業界の人なら分かることだが、600個近いインフォメーションを表示するという8.8インチのディスプレイは直径65mmというたった1個のダイヤルで操作するという。

話は登場したばかりのレンジ・ローバーに移り、買い換えたいけれどそんな金はないという私のぼやきでオシマイになったのだが、そのダイヤルが気になったので、ディーラーを訪ねてiDriveをチェックしてきた。

そのダイヤルは、画面に表示される8個のディレクトリを8方向にシフトしたりクルクルと回して項目を選択する機能と、ダイヤルを真下にコツンとクリックして、選択した項目を実行するという機能を持ったユーザーインターフェイスの権化である。小気味よく決まるシフトといい、カチッというクリック感といいさすがに吟味されているのはバイエルン気質の成せる技だと痛く感服して帰ってきた。OSがウィンドウズ CEなのかまでは聞けなかったけれど、とりあえずリセットボタンは見あたらなかった。ロック

3つの製品に共通しているのは、対応する表示デバイスが大きいことだ。ちなみに、マウスを発明したダグラス・エンゲルバートは今年が喜寿であるが、コンピュータで知識の共有をしようというNetwork Improvement Community構想に基づいてBootstrap Allianceなる組織を作り活躍中と聞いている。恐ろしいほどのバイタリティではある。

アップしたらどうするんだらうという素朴な疑問は、他のOSでも同じことだし本稿のテーマではないので省くとして、クルマもついに『そういう時代』に突入したということである。

「そういうって、どういう？」

などという徹夜明けの西田デスクみたいな喧嘩を売らないでいただきたい。ただただ、そういう時代なのである。

円運動は巻き物に通じる？

ウィンドウズ対応が登場するくらいまでにアップルのiPodは大成功である。10時間駆動とかFireWireによる高速転送とか成功の要因はいくつでも考えられるけれど、私は意外にあのユーザーインターフェイスとそれに呼応する大型液晶が最大のヒットだったのではないかと思っている。リリースの順番が逆になったが、7シリーズのiDriveと基本的なオペレーションはまったく同じである。1個の円をポンと与えてその外周を4分割し、同心円の中央部に実行ボタンを配しただけの至極単純なインターフェイスがもたらしたのは、ゴテゴテと付いていたボタンが消えた、プレイヤーのすっきり顔だった。

リテラシー習得の時間が極端に少なく、使いこなせる自信がムクムクと湧いて来ると、ユーザーは本腰を入れてモノと付き合いようになる。某調査によればユーザーが転送している平均曲数は320になるという。

これはすごい数字である。サクサクとエンコードできるとはいえ、iPodとの付き合いが半端ではないことを物語っている。

優れたポインティングデバイスは、表示デバイスとの相対化がこなれている。冒頭のDynaBookなどは最たるものだが、同じタッチパッドでもiPodやiDriveの方向性を選んだのがパナソニックのLet'sNote Lightである。円形のタッチパッドは、外周を指でクルクルとなぞることによってウィンドウのスクロールを可能にしている。相対化という点ではDynaBookの方が即物的ではあるけれど、その分、タッチパッドの下端まで指がきた時にもう一度上端まで指を移動するというリテラシーを要求してくる。マウスでも同じことが言えるのだが、初めて触る人は机の端までマウスが来てしまうとどうしているのか困るのだ。

その点、等速円運動が単振動として直線上に投影されるといってiPod達のコンセプトは、クルクル回せば動き続けるという帰納性がリテラシーを背後から助けている。単振動を時系列化した正弦曲線が、詰まるところスクロールするウィンドウに相対しやすいのは、そもそもスクロールの正体が巻き物としての即物性につながっているからだといはにらんでいるけれど、そんな小難しいことを知ってから円と付き合うヒトはいない。

円は摩訶不思議で割り切れないモノだが、ヒトとの相性はばつぐんなのである。IM



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp